



フウセントウワタ

94 篇は詠み人知らずですが、冒頭の **主よ、報復の神として／報復の神として顕現し／全地の裁き手として立ち上がり／誇る者を罰してください。(1,2)** との報復(復讐)という言葉にたじろぎます。

モーセは死を前にして「モーセの歌」を語り、神の言葉として全会衆に聞かせました。その結論部分で **わたし(神)が報復し、報いをする(申 32:35)** と民を励ましました。血を流すほどの苦しみを民に与える者には、神が報復するとして「神の名のもとに」、「主のために」報復することが聖書に多々記されています。誰も不当で、不法な害を被ったと感じる時には、同害報復の「目には目を」が当然であると考えます。

94 篇では報復すべき相手は **逆らう者はいつまで、勝ち誇るのでしょうか。(3)** とあるように神に逆らう者であり、彼らは **驕った言葉 傲慢に語ります。(4)** とありますように、悪を行い、力を誇示しています。一方、被害者は **やもめや寄留の民を殺し／みなしごを虐殺します。(6)** とありますように、社会的弱者です。彼らに報復の手段があるでしょうか。逆らう者が「**主は見えていない。ヤコブの神は気づくことがない**」(7) とうそぶくのに対して、その傍らで、詩人は **主は知っておられる、人間の計らいを／それがいかに空しいかを。(11)** と、彼らの悪事は神の耳、目に達していると言います。

詩人は被害者の苦しみが神に知られていて、神の裁きが必ずあると信じ、**いかに幸いなことでしょう／主よ、あなたに諭され／あなたの律法を教えてください人は。(12)** と感謝します。それゆえ **その人は苦難の襲うときにも静かに待ちます。(13)** と忍耐します。苦しい忍耐の中で、神の **慈しみ 慰め** が **魂の楽しみとなりました。(18)** と告白しています。

けれども、ただ忍耐して、沈黙しているのではなく **災いをもたらす者に対して／わたしのために立ち向かい／悪を行う者に対して／わたしに代わって立つ人があるでしょうか。主がわたしの助けとなってくださなければ／わたしの魂は沈黙の中に伏していたでしょう。(16)** と、被害者のために立ち向かい、被害者に代わって立ち、助けて下さるのは神のみであることを覚え、神に向かって、声をあげ続けます。詩人は **彼らの悪に報い／苦難をもたらす彼らを滅ぼし尽くしてください。わたしたちの神、主よ／彼らを滅ぼし尽くしてください。(23)** と、神による報復を祈り求め続けます。

神による報復を信じ、自ら手を下さず、神の裁きに敵を委ねようとしたのはダビデです。逃げ隠れていると思われかねません。けれども、主イエスはそれ以上に **あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。(マタ18:22)** さらに **敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。(マタ5:44)** と、報復ではなく、無限に赦し、執り成しの祈りをせよと言われます。

『讚美歌 21』は 440「備えて祈れ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2011-09-04> を関連させています。敬虔に「覚めて 祈れ」と自らを鼓舞しつつ、神に祈り続けています。

ジュネーブ詩編歌はピオラ・ダ・ガンバとオルガンの合奏です。それぞれの楽器による変奏部分が加わって、魅力的な賛歌です。

<https://www.youtube.com/watch?v=UniYiaaTvug&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=94>